

時間を測り、動きを揃える唄 ～越後酒造り唄～

茂手木潔子

(東洋音楽学会・聖徳大学)

酒屋唄(酒造り唄)は、酒造工程に沿って蔵人(蔵で働く技術者)が歌う唄である。「唄半給金」と言われ、時計のない時代の計時機能や集団作業を揃えるために歌われてきた。新潟県の酒造関係の文献から、酒屋唄の歌い始めは18世紀後半ごろかと考えられる。発表者は、昭和60年代から蔵人への聞き取り調査を開始し、「仕事唄としての酒屋唄」の再現と継承活動を行っている。

越後杜氏の酒屋唄には、寺泊の漁師の躍動的な様式と、頸城・長岡周辺の農業に従事した蔵人の穏やかな様式(関東流、朝日流)の2種類があり、起床時の独特な掛け声や祝詞の様式の曲まで含めて、種類の多い地域では10種類ほどが歌われた。

調査の結果、唄の目的は以下にまとめられる。()内は唄の名称。*印は映像で紹介した唄。

- (1)計時機能(酛^{もと}すり唄、*米洗唄、*仕込唄、仕込^{もと}、二番^{もと}、三コロなど、集団で歌う唄)
- (2)計量機能(*数番唄など、数を数える時の掛け声)
- (3)動作を合せる(酛^{もと}すり唄、米洗唄、仕込唄、二番^{もと}、三コロなど、集団で歌う唄)
- (4)仕事の精度を高める(桶洗唄、流し唄など個人で歌う唄)
- (5)勤務状態のチェック(桶洗唄、流し唄)
- (6)安全祈願(切り火)
- (7)眠気を振り払い、寒さを凌ぎ寂しさを紛らわせる(桶洗唄、流し唄、酛^{もと}すり唄)
- (8)共同体の確認(甑倒しの時に歌う)
- (9)娯楽として(蔵人たちの宴会など)

(8)(9)は仕事以外の場で歌う時である。

酒造り工程で歌われた酒屋唄であるが、蔵人たちの声は遠くまで響き、身体の動きから出る声の説得力は素晴らしい。彼らは発声を習ったわけではなく、仕事の中で必要に迫られて声を出す鍛錬をした。仕事唄だからもちろん歌詞集も楽譜もない。現場でひたすら先輩の唄を聞き模倣することから始まる蔵人の唄の鍛錬法は、日本の伝統音楽の学習方法とも共通する。唄に習熟する過程で仕事に習熟し、臨機応変な対応力も蔵や地域の空間把握もできるようになる。

本物の酒屋唄は人に聞かせるための唄ではなかった。酒造工程で攪拌時間を計るため、集団作業の手足の動きを揃えるため、厳しい技術出稼ぎの環境で自らを鼓舞し癒し寂しさをまぎらわせるために歌い、同業者不在の場で歌うこともなかった。だから、家族でさえ夫の、父の唄を聞いたことがなかった。蔵人は自ら歌詞を作り、旋律にも自由な装飾を加え、作業の進み具合で自由自在に唄を伸縮した。この活動の継続で、熟練の蔵人たちには臨機応変な思考が身についた。唄によっては作業の力点が強拍として強調され、3拍目が強拍で長めになることもあり、独特な拍子の唄になった。民謡歌手の酒屋唄にはこの拍子感がないから普通の「民謡」になってしまう。身体を動かして仕事をしながら歌って初めて酒屋唄は本物の酒造りの唄になる。

注：ここでは、酒屋唄のような歌唱様式を「唄」と表記し、歌う行為は「歌う」と表記した。